

JASAL 2025 学会参加報告書

Report on JASAL 2025 National Conference

馬渡 瞭、宮崎大学

Ryo Mawatari, University of Miyazaki

hn22320@student.miyazaki-u.ac.jp

著者について

馬渡 瞭は、宮崎大学工学部電気電子工学プログラムに所属する4年生であり、太陽電池モジュールに関する研究を行っている。その一方で、学生が気軽に英語に触れられる環境づくりを目的として、英語サークル「Direction」を立ち上げ、学生主導の英語活動の運営に携わっている。

2025年10月11日にAPUで開催されたJASAL 2025 National Conferenceに参加し、英語によるポスター発表を行いました。本報告では、参加前に抱いていた期待と実際の経験、発表内容とそこから得られた示唆、他の発表からの学び、今後の実践への応用と後輩への助言について整理します。

本研究の発表にあたり、JASALより学会参加のための旅費補助を受けました。ここに深く感謝いたします。

期待と実際の経験

参加前は「これまで参加したことのない国際学会での英語発表・質疑にどれだけ発表者として対応できるか」を試したいという期待がありました。また、国際的な環境として知られるAPUを実際に見てみたいとも考えていました。実際には、多くの留学生や研究者がAPUに集い、英語での会話が絶え間なく行われる活気ある環境でした。JASAL 2025 National Conferenceに参加したことで、英語での発表と質疑応答の難しさを痛感すると同時に、様々な国籍の研究者がもたらす異文化の環境に身を置くことで発表方法や質疑応答での対応方法を学ぶことができました。さらには学会テーマである「セルフ・アクセス・ラーニングにおける情緒要因」に関して、学習者の感情は学習が行われる環境や人との関わり方によって大きく左右されるという視点を得ることができ、英語活動を運営していくうえでの手がかりとなりました。

自分の発表（ポスター）の概要と学び

私は、指導教員である宮崎大学の川崎先生と共にこの学会に参加し、「Student-led English Activities in Engineering Faculty」というタイトルで宮崎大学工学部の学生主導による英語学習活動について、ポスター発表を行いました。具体的には、昼休みに行われている英会話活動 Lunchtime English を基盤とした学生リーダー組織の形成や、英語サークル「Direction」による英語活動、ワークショップ、大学祭での英語ベース運営など、多様な取り組みの実践を示しました。また、学生が主体となるこ

とで生まれた変化として、英語を使う心理的ハードルの低減、学習コミュニティの形成、留学生との交流による国際的視野の拡大などの成果を報告しました。さらに、後継学生の不足や活動のマンネリ化といった課題にも触れ、今後の活動の方向性について考察を述べました。

多くの方々にポスター発表に来ていただき、来訪者との双方向でのやり取りを通して英語を使って説明することができました。ポスター発表を通じて感じた主な点は次の通りです。

- ① 英語運用能力の課題：相手の質問を正確に聞き取る力、求められる回答を短時間で構成する表現力の不足を痛感しました。
- ② 感情と動機づけへの関心：聴衆からは、発表で紹介した英語活動へ取り組むモチベーションや感情に関する質問が多く寄せられ、自身の研究テーマと学会テーマ（感情・自律学習）が結びついて評価された点が印象的でした。

また、「自分の関心や好きなことに結びつけた英会話会やプレゼン会」を実施することで、より熱量のある英語環境作りが可能であり、異文化交流を促進できるというフィードバックを得られたことで、これから英語活動のアイデアとして参考になりました。

印象に残った講演・発表

Dr. Maria Giovanna Tassinari (Freie Universität Berlin, ドイツ) による基調講演：学習者は単なる個人ではなく、「文脈の中の人」、つまりその人のアイデンティティ、歴史、将来のビジョン、社会文化的な背景が学び方や感情、自律性の形成に大きく関わっており、その自律性は、必ずしも直線的ではなく、学習者のビジョンや他者、環境との相互作用によって生まれる動的なプロセスであることを知りました。特に印象に残ったのが、自己決定理論 (Deci & Ryan 1985) の観点から導かれる、人の動機づけを支える 3 つの基本的欲求についての話です。まず一つに、自律性、自分で選び行動できること。次に、有能感、自分の能力を効果的に発揮し、目標を達成で

きるという感覚。最後に関係性、他者とつながっているという感覚。これらが満たされることで、学習への感情的安定、モチベーション、自己調整能力が向上するという説明があり、無自覚的に意識していたことが講演を通してより理論的に知ることができ、興味深く感じました。

また、口頭発表「AI-Powered Simulator for Advisor Professional Development」(Sina Takada, Vola Ambinintsoa, Emily Marzin, Jo Mynard, and Satoko Kato, 神田外語大学)：初心者から高レベル学習者まで段階的にAI英会話の難易度を変えられることが印象的で、教育現場での応用可能性を強く感じました。

さらに、ポスター「Enjoying Your Way to Fluency: Language Learning With Games」(Michael Hofmeyr, 東京理科大学)：実際に爆弾解除ゲームを体験し、ゲームの没入性と、二人で協力しながら相手に指示を正確に伝えなければ解除できないという仕組みにより、英会話を行う状況が自然に生まれることを実感しました。学習者の興味を引きつけ、集中を促す活動であり、学習デザインの重要性を改めて感じました。

ネットワーキングと交流

短時間でしたが、会場では国内外の研究者や学生と濃密に交流することができました。特に、異文化背景を持つ参加者との対話を通して、新たな視点や今後の英語活動につながる出会いを得ることができました。一方で、留学生との直接的な英会話体験は貴重で、発音・イントネーション・スピードの違いから生じる相互理解の難しさを実感しました。

後輩へのアドバイス

今回の学会に参加して、相手の英語を聞き取りながらその意図を素早く理解し、自分の考えを英語で組み立てて返す必要がある場面が多く、その大変さを実感しました。こうした瞬時の理解と発話を支える英語力は、日頃から意識して鍛えておくことが大切だと感じました。また、発表者となれば、事前に想定質問を多数準備

し、短く端的に答えられるよう練習することも必要となります。

自分が発表者となって参加してみたことで、発表内容を伝えたいという動機と熱意を意識的に示すと聴衆にも伝わりやすく、質疑応答では聞き取れなかったら聞き返す勇気を持つことで双方向のコミュニケーションとなり、相手との建設的な対話ができることが分かりました。

結び

JASAL 2025 National Conference は、幅広い学術的な示唆を得る場となっただけでなく、自分自身の英語による実践的な対話能力の課題と改善の方向性を明確にしてくれた貴重な機会でした。今後は今回の学びを踏まえてさらに英語学習活動の企画運営に積極的に携わりながら、大学院入学に向けて英語運用力と発表技術の両輪を高めることで、より効果的に研究成果を国際社会へ発信していきたいと考えています。

参考文献

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. Springer Science & Business Media. <https://doi.org/10.1007/978-1-4899-2271-7>